

会長に再任してのあいさつ

この度日本放射線影響学会の会長に再任することとなりました。評議員会・総会で、学会員のみなさまのご支援を受けてのことと思っております。先の2年間の会長の期間に学会事務センターの倒産が起りました。全国的に大きな事件となりました。本学会も大きな損失を伴いました。また、学会誌の発行が遅れたことも多くの会員、研究発展に多大の迷惑をおかけしまして申し訳ありませんでした。学会事務センターではそれ以前から小さな不祥事が起こりつつあったのですが、倒産にまで発展すると予測することができなかったのです。学会事務センターの倒産の可能性が大となった後、出来るだけ損害を少なくすることを努力し、学会活動の遅れを取り戻すべく常任幹事はじめ多くの会員のご協力を得まして、最小限の負債ですんだと自分に言い聞かせてまいりました。

放射線・放射能が発見されて100年余となります。この放射線・放射能は現在では電気エネルギー生産、工業・農業分野、医療分野などさまざまな現代生活のなかで、なくてはならないものとして利用されてきております。しかし、時としてその利用法、取り扱い方に問題を起こして、社会問題として広く国民に注目されてきております。日本人のがん発生の原因の3.2%が医療放射線による検査で生じたとする2004年の研究雑誌ランセットの論文もその一つです。また、放射線治療において放射線線量を誤ったという報道もありました。日本のジャーナリズムがこれらの問題を大きくとりあげ、国民の医療被曝の危険性が注目されました。しかし、日本は世界で最長寿命の国でもあります。医療放射線は病気の初期診断に大きな貢献があることも事実です。放射線はリスクとベネフィットを持ち合わせているので、まさに「両刃の剣」であります。現在の医療ではX線撮影のみならずCTやPETなど放射線・放射能なくしてはもはや成り立たないほど、医療に大きな貢献が発揮されているのです。いかにリスクを押さえベネフィットを伸ばすかは医療に携わる全ての方々の英知に依存するのです。これらの問題も会長就任すぐに取り組みなくてはならない課題でありました。実に会長としての自覚を強いられた事件でもありました。医療従事者にいかに放射線のリスクとベネフィットを教育していくか、将来の医療に携わる若い後継者にいかにこの放射線教育をしていくかが重要であると、再認識いたしました。医学関係の教育にも改革の嵐が吹いています。いかに充実した放射線教育を広めていくかが、今後の課題となりましょう。それにもまして、低線量放射線、低線量率放射線の生物影響研究の発展が急務であります。国民の医療放射線被曝をいかに抑えるか、被曝限度を適確に示すことのできる科学的論拠を実験的に証明するかが重要であります。これらのことも会長として、次の2年間の大きな課題でありましょう。

学会のさらに先の長い将来を考えて、2011年にはInternational Congress of Radiation Research (ICRR) を日本に招聘すべく活動を行ってまいりました。しかし、先のInternational Association for Radiation Research (IARR) councilor meeting において4連敗になってしまいました。IARRへの年会費については米国に順ずる多額を納めてきておりますのに、実に巧みな運営に辛酸をなめさせられつづけた結果となりました。思わず国際社会での日本の立場に置き換えてしまいました。世界の場での交渉の巧みさが研究者にも要求されるとは誠に残念でたまりません。それよりも、放射線科学研究の質の高さを求めて努力することの方が大切であると再認識させられました。

世界的テロリズム、中近東情勢など不安定な世界情勢はいまだ変わっておりません。アジアも例外で

はありません。特にアジアでは放射線・放射能の面からも不安定であります。科学者として放射線・放射能が平和的に利用されることを心より祈っています。アジア各国の間で日本がリーダーシップを発揮し、科学者相互の理解を深め、次世代の研究者の育成をめざすとともに、質の高い研究へと発展させることが強く求められている時でもあります。その実現をめざし、アジア放射線研究会議 (Asian Congress of Radiation Research; ACRR) を計画してまいりました。2005 年秋日本放射線影響学会の定期大会と第 1 回 ACRR 合同大会が日本放射線研究連合との共催で原爆被爆地広島市において開催されました。皆様のご協力を得て多数の研究者がアジアから参加され、成功裡に終わったことは誠に感慨深いことでもあります。その際にアジア放射線研究連合 (Asian Association for Radiation Research; AARR) が設立されました。今後 4 年に 1 度 ACRR が開催されていく道筋が確立いたしました。

学会運営については、この 2 年間に「組織運営検討委員会」のご尽力によって学会運営・組織の再検討が行われ、学会会則・規程・申し合わせなど全てが改正されました。今後は本学会に近い放射線科学関連の学会・研究者とも新たな協力体制の構築が求められます。学会員みなさんのさらなるご支援、ご協力をお願い申し上げます。

中国の程伊川のことばに「学者は全く時を識るを要す。若し時を識らざれば、以て学を言うに足らず。」とあります。今、新しい研究手法が激しく進んできております。今こそ、さまざまな新技法を取り入れて、今まで理解できなかった放射線科学のさまざまな分野での研究テーマを果敢に解明する努力を根気強く続けていくことが何よりも大切です。学会員各位の研究の発展を心より期待申し上げます。

平成 18 年 1 月吉日

日本放射線影響学会 会長 大西武雄